

第5回 医師とは創意する者である。

形成外科の発祥は古代インドに遡り、技術の確立は第一次世界大戦を契機としている。古代インドでは人体に直接損害を与える刑罰を受けた人々に対して、第一次世界大戦では四肢や顔を負傷した兵士を治療するためのものであった。傷ついた身体を元通りに取り戻したいという気持ちは、人間の普遍的な願いでもある。

大阪医科大学附属病院・形成外科で科長を務める上田晃一は言う。
「形成外科とは、外見的な形態はもちろん、内部の支持組織までを解剖学的に再建することでその機能を回復させるというものです。学問としての形成外科は内科や外科などに比べればかなり新しい分野であり、特にここ30年は目覚ましい進化を遂げています」

上田が形成外科医を志したきっかけは、ある恩師との出会いだった。大阪医科大学形成外科学教室の初代教授、故・田嶋定夫氏である。形成外科の第一人者だった田嶋教授から薫陶を受けた上田には、今でも忘れられない手術がある。

今から二十数年ほど前の出来事。研修医となって二年目、クリスマスの夜だった。当直医だった上田のもとに急患の受入要請が入った。9歳の女の子が外鼻(がいび)を飼い犬に噛みちぎられてしまったという。救急隊員により外鼻が確保されていたことは不幸中の幸いだった。上田は指導教授だった田嶋教授の指示を仰ぎ、外鼻を再接着する緊急手術に備えた。

「当時の日本には、外鼻の再接着に成功した例はなく、世界でも数例あったかどうかという稀なケースでした。顕微鏡を使った“マイクロサージャリー”という高度な手術が必要となりました。外鼻は人の末端に近い所とはいえ、動脈は動脈と、静脈は静脈とを正しくつなげなければ壊死を引き起こす危険があるためです」

動脈はつながったが、その周辺にある微細な静脈は極めて至難であった。だが、血流の逆流が見られた動脈を静脈と縫合することで手術は成功する。

しかし重要なのは、術後のケアだ。手術室を出た田嶋教授は言った。
「人間は一週間眠らなくても死なない。でもこの患者の外鼻は、お前が瀉血(しゃけつ)を怠れば壊死してしまう。どうだ、できるか？」

鬱血した患部には瀉血が必要だった。溜まった血液を針で突き、排出させ続けなくてはならないのだ。
「田嶋先生は、二年目の研修医だった私に、術後の管理を一任されました。必死になって図書館で文献を読みあさり、自分なりの結論をもって相談に行くと、田嶋先生は頷かれ、君に全部任せるよとおっしゃった。私は患者さんと先生の想いに応えようと心に決めました」

それから一週間、上田は文字通り不眠不休で処置を施した。手術当日は一時間に一度、二日目は二時間に

一度という間隔だった。三日目ほどで患部周辺の毛細血管がつながりはじめ、無事に生着していった。

「術式や術後のケアは、必ずしも教科書に載っているわけではありません。だから医師には想像力が必要。田嶋先生から学んだのは具体的な術式はもちろんですが、それよりも取り組み方や考え方といったことの方が大きかったように思います。それは自由な発想と方法を自ら見つけて欲しいというメッセージだったのでしょう」

形成外科医の創意工夫が術後の結果に大きく作用した事例は、他にもある。作業中に軍手がベルトコンベアに巻き込まれ、手の皮膚と皮下組織が捲れ上がってしまった患者のケースも同様だった。外皮は残っていたが壊死する可能性が高く、そのまま傷口を塞ぐだけでは腱が癒着し、手を動かすことが困難になってしまう。

「人間の手というものはとても繊細にできています。手や指を動かすために腱があり、その周りは腱が滑りやすい組織に包まれているのです。この患者さんの場合、腱の機能を維持できるような組織を移植し、すぐにリハビリをはじめることが必要だと判断しました」

人間の手はギプスに数週間固定されるだけで、腱が周りと癒着し、動かすことができなくなる。移植は一刻の猶予も許されない。上田が選択したのは、頭部にある筋膜を血行のある状態で移植することだった。

「捲れ上がった皮膚と患部の間に、筋膜を移植して挟み筋膜の栄養血管を顕微鏡下に側頭部の血管と縫合しました。外皮は壊死する傾向にありましたが、内からは血流のある新しい組織がつくられていました。リハビリは、手術の翌日からはじめてもらいました。」

患者は元の職場に復帰できるまでに回復した。腱の周囲に血流のある筋膜を使うという術式は当時過去に例がなく、上田が生み出した新しい術式だったと言っていい。後に上田はこの発想と実践を英語の論文として発表した。各方面はもちろん、マイクロサージャの権威からも高い評価を受けた。以来、上田は論文発表の場を海外へ積極的に広げている。

先頃、上田にうれしい出来事があった。9歳だったあの少女が立派な大人になって、旦那さんとともに会いに来てくれたのだ。この思いがけない再会は、これまで上田が積み上げてきた経験と思考と方法が、間違っていないことを裏付けているだろう。

「先生のおかげで、幸せな家族を持つことができました」

そう笑顔で話す彼女のお腹には、新しい命が宿っていた。

上田が必死になって瀉血し続けたあのクリスマスの夜が昨日のこのように甦り、自然と涙がこみ上げてきた。そして、恩師の教えと自身の経験を、次代の医師に受け継ぐという自らの使命に身を引き締めるのだった。

大阪医科大学附属病院
形成外科学 教授
形成外科専門医
上田晃一(うえだ こういち)